神谷ポンプ所界隈の今昔

平成十七年三月末をもって志茂ポンプ所（北部第二管理事務所管内）が老朽化により廃止になり、近接地（隅田川右岸の北区神谷三丁目）に新たに神谷ポンプ所が建設され、四月から運転を開始しました。ポンプ排水区の拡大と雨水排水能力の強化を図る再構築事業の一環として実施されたもので、十年の歳月を経て完成しました。運転はみやぎ水再生センターから遠隔監視制御されています。

▲ 神谷ポンプ所

今回の職場界隈探訪は、新装なったこの神谷ポンプ所界隈の今昔を訪ねてみることにしました。

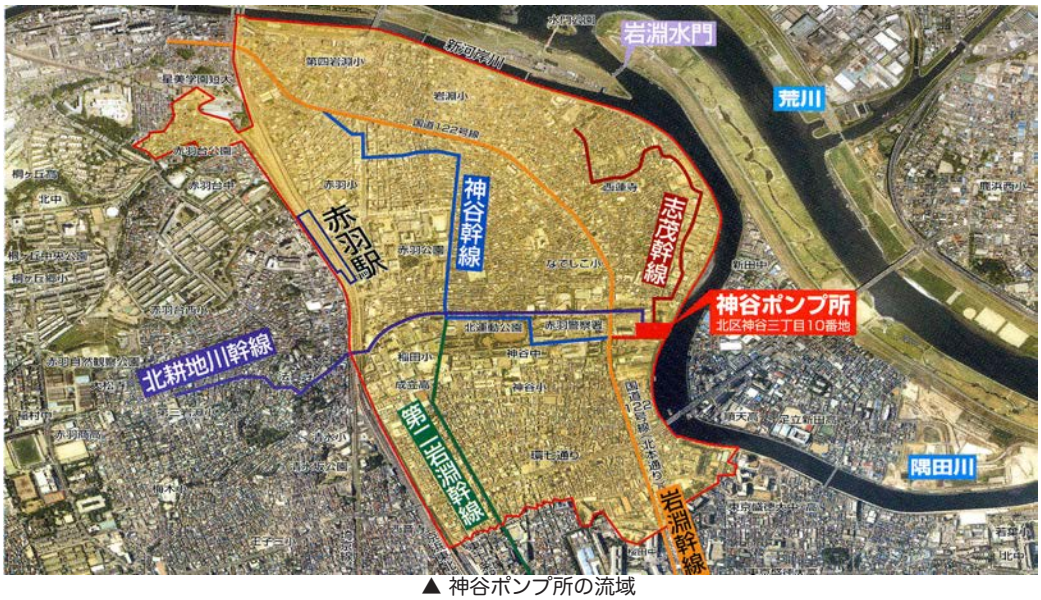
探訪ルートは、最寄りの地下鉄南北線志茂駅からスタートし→旧志茂ポンプ所を経て神谷ポンプ所→志茂銀座通り→荒川知水資料館→岩淵町→岩槻街道→JR赤羽駅です。古い街道筋を歩く、宿場の痕跡を探す一日となりました。

志茂銀座通り

北本通りと隅田川に挟まれた志茂銀座通りを、地元の人たちは「旧道」とか「往還」とか呼んでいます。隅田川沿いの微高地を辿る古くからの道筋で、王子から岩淵町に続いています。遠く奥州へつながっている古道で、奥州道ともいわれていたそうです。沿道には、子育地蔵堂、西蓮寺、庚申堂、熊野神社などがあり、随所に歴史的な古さを感じさせる神社仏閣が残っています。志茂地区で江戸時代から続く旧家の大部分は、この往還と隅田川との間に集中しています。

昭和初年に画かれた手書きの交通系統図をみますと、昭和二年の王子軌道電車の開設に伴い新たに拓かれた北本通りの西に沿って、うねうねと北上し、発電所の手前で北本通りを横断している道がこれです。「府道岩淵神谷線」と記されている辺りが志茂銀座通りの商店街です。この道は、中世期にすでに存在していた可能性が強く、岩淵宿を東西に横切り、板橋方面からの道と交差していました。

ここで発電所とあるのは、旧国鉄の鉄道用の赤羽火力発電所のことです。現在、北清掃工場があるところで、今年の三月に廃止になった志茂ポンプ所もこの一画にありました。この発電所は大正十二年に営業運転に入り、昭和二十七年まで稼動していました。発電所で使う冷却水は、隅田川に通じる掘割から取水していました。排水路もこれと平行して流れていました。これら



▲ 神谷ポンプ所の流域

は、現在は埋め立てられ公園になっています。

昭和の初期に、荒川改修工事で掘り出された土で付近の低湿地が埋め立てられ、住宅地化が進むと、土地の旧家も農業の傍らあるいは農業をやめて店舗を旧道筋に構えるようになりました。関東大震災で移住してきた新住民の中にも店を出す者が増え、約二百メートルの三間道路と呼ばれた狭い通りの両側には、酒屋、八百屋、魚屋、肉屋、豆腐屋、米屋、花屋、雑貨屋、薬局、畳屋などが肩を寄せ合うように連なっていました。下駄屋や浴場や理髪店や煙草屋もありました。近所の住人を対象にして、日常生活の必需品をそれぞれ専門的に商っていたのです。

平成三年に地下鉄南北線が開通し、志茂駅ができ、近くに大手スーパーが進出したため客の流れが変わってきたそうです。

▲ 隅田川からみた水路の水門

▲ 水路跡の公園

▶北清掃工場

◀旧志茂ポンプ所

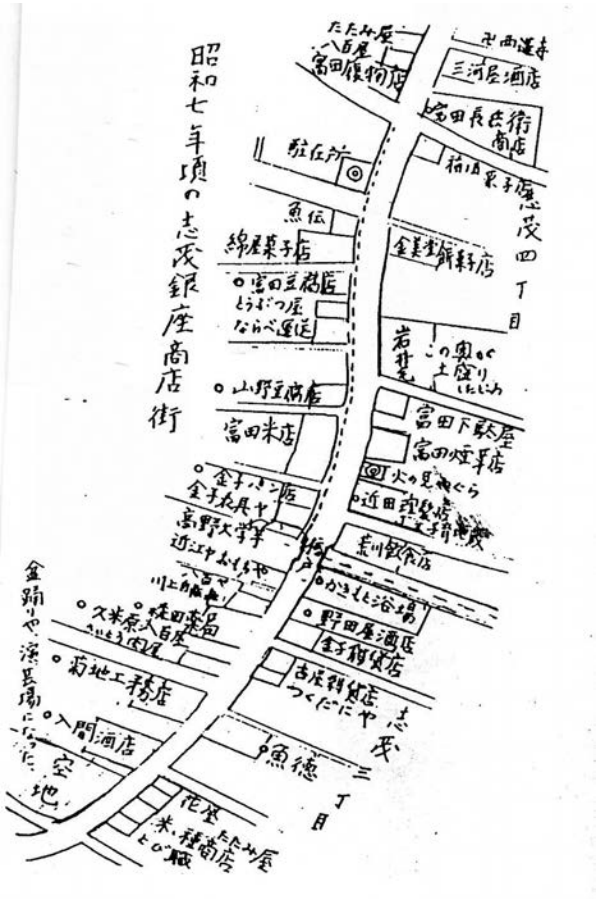
岩淵宿

岩淵宿は、鎌倉から奥州へ通じる奥大道（鎌倉街道・中の道）が入間川（現在の荒川）を渡る地点にあり、すでに鎌倉時代から交通の要衝として栄えていました。前図に、岩淵本宿と記されているところです。

鎌倉街道・中の道は、鎌倉から二子玉川、渋谷、池袋、板橋、滝野川、赤羽、岩淵、川口、岩槻を経て奥州に抜ける道です。

これとは別に宿を東西に貫通する古街道と称する道（先ほど述べた志茂銀座通りを含む道）が通っていましたが、その一画は古宿と呼ばれていました。

◀岩淵町の交通系統図



▲ 昭和７年頃の志茂銀座商店街

中世の頃、鎌倉街道・中の道は、古宿の地に現在もある八雲神社の前で渡河していたと考えられています。

かつて、源義経が兄頼朝の挙兵の報を聞いて奥州から駆けつけたときに渡ったのはこの辺りで、ここから板橋方面へ進んだとされています。

十三世紀の終り頃、この道を旅した久我雅忠の娘二条の尼が綴った記録「とわずがたり」に岩淵宿の名がみえます。

『師走になりて、川越の入道と申す者の跡なる尼の武蔵の国小川口といふところへくだる。あれより年返らば善光寺へまゐるべしといふも、便りうれしき心持して、まかりしかば雪ふりつもりて分ゆく道も見えぬに、鎌倉より二日にまかり着きぬ。かやうの物距たりたる有様、前には入間川とかや流れたる、むかへには岩淵の宿といひて遊女共の住家あり。山といふ物はこの国内には見えず。はるばる武蔵野の茅が下折れ、霜枯れ果ててあり。なかを分けすぎたるすまひ思ひやる、都のへだたり行くすまひ、悲しさも、とりかさねたる年の暮なり』

岩淵は、鎌倉街道・中の道のなかでも最も重要な地点の一つでした。

その後江戸時代になり一六五八年頃、日光御成道として整備された岩槻街道は、この鎌倉街道・中の道が一部変更されたものです。このとき、渡河地点がやや上流の現在の新荒川大橋の辺りに移りました。いつもは舟を用いていましたが、将軍が日光へ社参するときなどは、長さ百二十メートル、幅六メートルの舟橋が臨時に架けられました。舟橋とは舟を何艘も横に並べて、その上に板を置いた浮き橋のことです。

江戸時代の岩淵宿（街並み五百メートルほど）の中心は、現在の小山酒造の入り口辺りで、「岩槻街道岩淵宿問屋場跡之碑」が建っています。

▲ 岩淵宿問屋場跡之碑

▲ 八雲神社横の巡拝塔と庚申塔

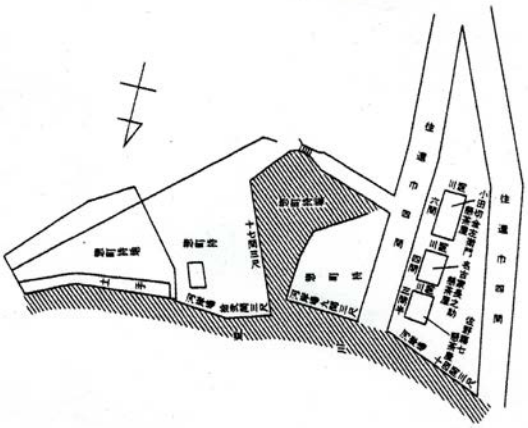
問屋場とは、宿場から宿場へ人馬を使って荷物などを運送するとき、この人馬の継ぎ立てをした役所です。大名や高貴な方の宿泊所である本陣の小田切家もこの付近にありました。旅篭としては、大黒屋、若松屋などがありました。

「遊歴雑記」に、

『両側食店必至と軒を並べ思い思いの暖簾の風にひるがえる風情ぞ所がらとて一風あり』

と、記され繁盛していました。

下の図は、明治初年の岩淵河岸の平面図です。対岸の川口への渡河や新河岸川や荒川の舟運で賑った河岸です。船溜りの入り江やいくつかの河岸場があり、岩淵宿から続く幅四間の往還沿いには、三軒ばかりの懸茶屋も立ち並んでいます。渡し舟を待つ旅人や物資を運ぶ船頭や馬方たちが、一休みしていたのでしょう。



▲ 明治初年の岩淵河岸

明治になり政府は、資力のある者に道路や橋や用水などの社会的インフラ施設を建設させ、これの有料化を勧めましたが、栃木県人の大野孫右衛門が岩淵渡しのところに恒久的な舟橋を架け、橋銭を取っていました。明治三十八年のことです。昭和三年に新荒川大橋ができるまで利用されました。川を上り下りする伝馬船が来ると舟橋中央の一部を回転させてこれを通しました。通行料金は、一人一銭、人力車二銭、自転車三銭、荷馬車八銭であり、一日平均三十円三十銭程度の収入があったとのことです。

新荒川大橋が開通したことにより、ようやく川向こうとの自動車交通が可能となりました。

明治十六年に東北本線が開通してから、町の中心は赤羽駅周辺に次第にシフトしていき、岩淵宿界隈は寂れ活気のない町並になってしまいました。

なお、江戸時代の岩淵宿の中心地に建つ小山酒造は、明治十一年の創業で、先祖は川越の造り酒屋といいますから新河岸川の舟運と縁があるのかもしれません。現在では東京二十三区内唯一の酒蔵として、秩父の山から発する浦和水脈からの伏流水を地下百三十メートルから汲み上げて酒造りに使用しているとのことでした。

▲ 23 区唯一の酒蔵 (今と昔のたたずまい)

岩淵町町名存続之碑

岩淵町の八雲神社の社殿の前に、「岩淵町町名存続之碑」があります。昭和三十七年公布の「住居表示に関する法律」は、その実施時に各地で地名問題が起こりましたが、ここ岩淵町でも、由緒ある「岩淵」宿の名前を残す運動がありました。明治二十二年の町村制で北

▲ 岩淵町町名存続之碑

豊島郡岩淵町となり、昭和七年に北区になってからも字名として残っていたのです。

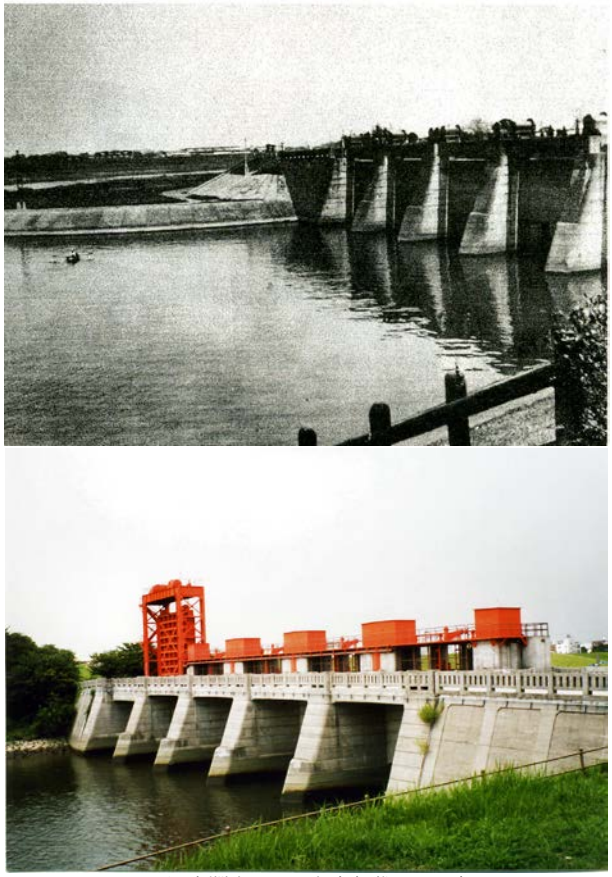
「岩淵町町名存続期成同盟」が結成され、区や区議会への陳情が行われました。十年間にわたる粘り強い運動が効を奏して、昭和四十六年、ついに、北区議会は町民の熱望を受け入れ、岩淵町の存続を議決しました。

この碑は、これを記念して建てられたものです。碑の脇の説明書きは、次のように記しています。

「明治、大正と二回にわたり、岩淵を赤羽にしようとする行政機関の動きがあったが、その都度わが先輩は岩淵の名を守り抜いてきた。このことを考えるとき、心ある人は今回の町名保存運動がどのようなものであったかということを理解していただけると思い、この記念碑を建立することにした。昭和四十七年」

岩淵水門

荒川本流から隅田川が分流した直後の所に、隅田川に流れる水量を調節することを目的とした岩淵水門があります。増水時にはゲートを閉じ平常時にはゲートを開け、一定流量以上の水が隅田川に流れないようにする九メートル幅のゲートが五門設置されていました。ゲートは赤く塗られており年代が感じられる構造物で、通称、赤水門と呼ばれていました。少し下流にできた新しい岩淵水門にその仕事を譲っており、昭和五十七年から使われていません。今は、歴史的土木遺産として保存されています。新水門のゲートは三門で、青く塗られています。旧い赤水門よりはるかに巨大です。



▲ 旧岩淵水門（昭和十年代）と現在

▲ 新岩淵水門

草刈の碑

赤水門を渡った河川敷の茂みに大きな石碑があります。

「草刈の碑　農民魂はまず草刈りから」との碑文が刻まれており、由来記には「…金肥の流行につれて草刈が衰え始めたので有畜農業の普及は却って益々草刈の必要を認めたから草刈奨励のため有志相図り…全日本草刈選手権大会を昭和十三年八月より此の地に前後六箇年開いた。鎌を競う選手四万余名、熱戦各二時間に亘り両岸に観衆溢れ旗指物なびいて一世の壮観であった…」

と、あります。

この碑が建てられたのは昭和三十二年になってからですが、か

▲ 草刈の碑

つての日本の農業の基本が、堆肥づくりにあったことを語る貴重な資料となることでしょう。

荒川知水資料館

新河岸川に架かる志茂橋を渡ると、右手に荒川知水資料館があります。隣は国土交通省の荒川下流河川事務所です。ここは、この事務所と北区とが共同で建てた施設で、荒川をはじめ、川や水について広く知ってもらいたいという「知」の意味を込めて「知水」資料館と名付けられ、平成十年三月に開館しました。

単に、パネルや資料を展示するだけでなく、学習や研究の拠点、流域の市民の交流や発表の場として幅広い活動を行っており、多くのボランティア団体が協力して運営しています。

この資料館から毎月刊行されている情報誌「ＡＲＡ」には、生活に密着した荒川に関する情報が掲載されています。

（文責　地田）

参考資料

「岩淵町郷土誌」　岩淵町
「北区の歴史」　東京ふる里文庫　名著出版
「北区史跡散歩」　芦田正次郎ほか　学生社
「北区史近世編」　北区
「北区史民俗編」　北区
「北区郷土誌」　北区史を考える会編発行
「荒川放水路物語」　絹田幸恵　新草出版
「荒川下流誌」　荒川下流河川事務所
「水道公論」（平成十一年十一月号）　日本水道新社

探訪余話

子どもの頃から赤水門に馴れ親しんできた地元の方々からの聞き書きを「都市河川の源流を訪ねて⑬　川とともに暮らす」（水道公論）から引用し、昭和三十～五十年頃の河原での遊びを再現してみることにします。

『子どもの頃、新河岸川に架かっている志茂橋を渡った中洲のすぐ先にあった赤水門の点検用通路を通って、隅田川と荒川との間に細長く続く河川敷によく遊びに行ったものです。この通路は小型の自動車なら通ることができました。河川敷のグランドで野球をしたり、笹薮で鬼ごっこをしたりしました。また、船頭さんに頼んで幅一メートルほどの手漕ぎの和船に乗せてもらい、荒川の対岸（川口市）にまで探検に行ったこともありました。

草原を歩いていて、足元から大きなトノサマバッタが跳び出てきてびっくりしたことがありました。河原にはアシがたくさん生えていて、ヨシキリがせわしなく鳴いていました。ある時、家の者がこの鳥をつかまえてきたので、鳥かごに入れてしばらく飼っていたことがあります。ザリガニやメダカなどの小魚はたくさんいたので、網ですくえるほどでした。シジミもとれましたし、ダボハゼも釣れました』

『夏になると、国鉄の荒川の鉄橋の下に特設の水泳場がつくられ、地元の子ども達でにぎわい、大人の人が監視をしていました。水練場と呼んでいました。また、この辺りで毎年夏、花火を打ち上げたので、みんなで赤水門の近くに出かけて見物しました。

この水門の角のところに大きな桜の木が何本か立っていたことを覚えています。そういえば、昔は赤水門からずっと下流に向かって河川敷が江北橋の方までつながっていましたが、今は赤水門の辺りの一画が、切り離されて小さな中洲になってしまいました。新しい水門を造った時、荒川からの分流路

をもう一つ開削したのでそうなったのでしょうが、気がつきませんでした。それから、赤水門の赤についてですが、ゲートの部分が赤く塗られているのでそう呼ばれていたのでしょうが、昔は灰色だったと思います。いつの頃からか、赤く塗り替えられました』

『春は、ツクシ、ヨモギなどの摘み草をしたり、土手に咲く桜やツツジの花見に行ったものです。また、志茂橋を渡った新河岸川沿いの中洲に、昔、建設省土木研究所の分室がありましたが、その敷地内にもツツジや桜がたくさん植えてあり、自由に出入りができたので、よく友達や家族と連れ立って見物に行ったものです。今、ここには新しく荒川知水資料館が建っています』